

落

語教室の写真は、写真屋の佐野さん（本人がこの呼称を好む）に撮ってもらっている。ずっと前からよく知っている人なので

ずいぶん無理を聞いてもらっている。ぼくも写真は見るのも撮るのも好きなのだが、寄席の間は子どもたちの様子を見守り、出囃子をかけ、時間配分を調整し、と気を張らねばならないため、とてもカメラを持つ余裕などない。落語教室を始めたころは、子どもたちの撮りたい表情に出合うと、カメラを用意しておけばよかったと悔いが浮かんできたのだが、今はもうすっかりあきらめがついて、写真はすべて佐野さんにまかせ、彼女の都合が付かないときはあきらめる、で何の痛痒も感じなくなった。

撮ってもらった写真は、ホームページやインスタグラムに掲載するのをはじめ、チラシを作る際にも利用する。佐野さんの写真がなかりせば、これらを作ることも、思いつくこともなかったろうし、こども落語も今とは違うものになっていただろう。

二年間、こどもたちの表情を追ってもらっている中で、もらった写真は万単位にのぼる。ホームページやインスタグラムに載せているのは、その中のほんの一部だが、それでもかなりの数になる。こどもたちが成長するにつれてどう顔つきが変わっていくのか、ま

た落語を通してどんな表情を獲得していつているのか、時を追って見ていくとよくわかる。

佐野さんが来られない寄席については、保護者に頼んで送ってもらうことがある。先日そのうちの一枚を見てはつとした。そこに写っていたのは、高座に上がったある子の小さな背中と、その先でその子を見つめているたくさんのお客さんの顔だった。つまり、演じ手から見える光景なのだ。

保護者は、いくら我が子が上がっているとは言え、高座の側に立つことはまずない。ただ一つ例外があつて、その子がかく幼くて高座への上がり下りや演じるのに手助けが必要な場合は、そばについてもらうことがある。たまたまそのような状態で写した一枚だったのだ。満員でぎゅう詰めになった客席に並ぶ顔がすべて高座に向かっており、そのどれもがとろけそうな笑みを浮かべ手を叩いている。写真を見ているこちらまで同じ顔になつてくるようだ。狙つて撮つたのではない、ただ我が子を追って写した中にまぎれこんだ一枚だ。そしてそれは、これまでの何万枚の中に一枚もなかったアングルだった。なぜなかったかを考えないわけにはいかなかった。

この一枚のおかげで、これから佐野さんと試行錯誤することになりそうだ。

老い老いに

木幡智恵美

62

師

走に入り、いよいよ今年も押し詰まって来た。私事だが、面倒な仕事ができず。国の基幹統計調査の一つである家計調査が当たり、十二月から半年間家計簿をつけて半月ごとに提出しなければならなくなったのだ。一応家計簿はつけているけれど、大雑把なもの。この調査では事細かく記録せねばならず、初めのひと月は、食料品のグラム数まで書かなければならない。現金で支払ったものと、クレジットやプリペイドカードなどでの支払いは分けて記載することになっている。実は家計調査は初めてではない。まだ現職だった頃にも当たっている。当たりくじなど大概等外でくじ運はすこぶる悪いのに、こういう面倒なことは当たってしまう。これも現職の頃、検察審査員にも当たって裁判所に通ったことがある。得難い経験ということでは運がいいと言えるんだろうけど…。

さて、夕焼け通信の十三年目もまた年末が訪れ、二〇〇六年に突入した。この年の10大ニュースは次の通り。

一、トリノオリンピックで荒川静香が金メダル獲得 二、ライブドア堀江貴文社長を証券取引法違反容疑で逮捕 三、秋篠宮妃紀子さまが男児を出産 四、日本銀行がゼロ金利政策を解除 五、第九十代内閣総理大臣に安倍晋三が就任 六、北朝鮮が初の核実験を実施 七、ジャワ島でM六・七の地震が発生 八、第一回WBCで日本が優勝 九、地上デジタルテレビの「ワンセグ」開始 十、夏の高校野球決勝戦が引き分け再試合 海外の物騒なことや悲惨な自然災害が混じっているが、国内のニュースはめでたいものが多い。この年に誕生した秋篠宮悠仁さんはもう成人された。月日が経つのは早いものだ。日本のフィギュアスケートで金メダルを初めてもたらしたのが荒川静香。得意技イナバウワはその年の流行語大賞になった。十位に入っている夏の高校野球決勝戦の再試合。あまり高校野球は熱心に見る方ではないけれども、マー君こと田中将大とハンカチ王子こと斎藤佑樹が対決するシーンには釘付けになった。野球のルールをほとんど知らない義母までがマー君の名前を覚え、それ以後夫と息子が野球を見ながら話していると「マー君は出ちょうかね」と聞いていた。

30代フリーター 近藤大介という中国ウオッチャーのジャーナリストが、10月に釜山であつた米中首脳会談を「習近平が初めてトランプに勝った会談」と動画で論評していた。

年金生活者 台頭する「帝国」である中国と、縮小する「帝国」となったアメリカの勢いの差を言い表している。11月24日にあつた両首脳の電話会談は、中国側の発表によると、トランプが「アメリカは台湾問題が中国にとって重要であることを理解している」と述べたという。これは台湾への関与をアメリカが弱めていくことを表明したに等しい。

30代 中国は台湾問題を「核心中の核心」と位置づける。

年金 それが「帝国」としての発展に欠かせないからだ。「帝国」の特徴は域内に多様な勢力を抱えているところにある。中央の権力はそれらの勢力から制約を受けるので、それによつて削がれた力を補うために、域外に服属国を持ち、それらの忠誠をつつかえ棒にして域内を統治する。「帝国」として

の中国にとつて、台湾はそうした服属国に相当する存在と考えられている。

トランプの発言は事実上そのことを容認したことを意味する。覇権国家、すなわち「世界帝国」だったときのアメリカにとつて、西側諸国は自らの服属国であり、台湾もそのひとつと位置づけられていた。しかし、「世界帝国」の座からずり落ち、「地域帝国」へと後退しつつある現在、それらの服属国を抱えきれなくなっている。トランプの「米国第一主義」はその表明にほかならない。

30代 台湾の最大野党・国民党の主席に「超親中派」と言われる鄭麗文が選ばれた。

年金 近藤大介によると、鄭麗文は「（台湾総統の）頼清徳はアジアのゼレンスキーになろうとしてしているのか？」と言ったそう。ウクライナがロシアを挑発して呼び寄せたように、中国に反対ばかりしていると、中国が本心に攻めてくるぞと言っている、と近藤は解説している。台湾の世論が少し変化し始めていることを示している

と考えることができる。

台湾民意基金會の10月の世論調査によると、20歳以上の台湾人のうち、44・3%が台湾独立を、24・6%が現状維持を、13・9%が兩岸統一をそれぞれ支持している。これを去年12月の調査に比べると、独立派が7・5ポイント減少したのに対し、現状維持派は0・4ポイント、統一派は0・6ポイントそれぞれ増加している。

台湾の世論の大勢は依然として「反中の」だが、「親中の」な世論も少しずつ広がり始めていることを調査結果は示している。中国の強大化とアメリカの覇権の後退という世界的な変化の反映をそこに見ることができる。アメリカには次第に頼れなくなっていくから、中国とは事を構えるより、友好的な関係を保つたほうがいい、という判断が広がる可能性があるということだ。

30代 中国経済が停滞から脱するには、規制の緩和をはじめとした市場原理の優先が必須のはずなのに、習近平政権は逆に統制を強めている。

年金 かつて国家が資本を統制した

「重商主義」の時代に世界が回帰しつつあると習政権は認識し、それに適応する政策をどこよりも早く進めようとしていると思われる。

伊藤貫という評論家は、世界は「新重商主義」の時代に向かってしていると指摘する。「重商主義」は資本主義が商業資本主義の段階にあつた16〜18世紀のヨーロッパで絶対王政国家が採った経済政策だ。国家が軍事力を使って植民地の獲得や貿易航路の開拓を進め、植民地貿易、遠隔地貿易をあと押しした。

それが形を変えて現在に回帰してきたと見ることができる。背景には先端科学技術の開発競争がある。AI、IoT、半導体、バイオテクノロジー、新素材、航空宇宙、ロボティクスといった先端科学技術は開発に膨大な費用がかかる。これまで「新自由主義」の名のもとに国家の介入を避けたがっていた資本は一転して、開発費用の負担を国家に求めるようになった。出番

が減っていた国家はここぞとばかり開発のあと押しに乗り出した。

かつての「重商主義」の時代も、資本に対する国家の支援、介入が大きなウェイトを占めた。利潤の源泉だった

ニュース日記 996
中村 礼治

中国はどこへ向かうか

植民地貿易、遠隔地貿易を支えた航海術の開発や航路の開拓は現在の先端科学技術の開発に相当する。当時の欧州の主要国は航路開拓のための探検航海に資金を提供したり、航海学校を設立したり、天文学者や地理学者を支援したりして、航海術の発展をあと押しした。

国家による市場への介入、市場の統制は独裁中国のいわば「得意技」だ。当面の経済停滞は国民に犠牲を強いることでのぎ、先端科学技術の開発に投資を集中していけば、やがて新たな一大産業インフラを世界に先駆けて築くことができる。それは新たな段階の資本主義の発展の土台になるだろう。商業資本主義時代に開発された航海術や遠洋航路が、次の段階の産業資本主義の発展の基礎になったように。そのときこそ中国はアメリカを凌駕して覇権を手にすることができると。長期的なものごとをとらえる習慣がある中国の指導者が、そうした未来像を描いている可能性は否定できない。